

天壤・無窮の合言葉

班長殿、敵です。確かに敵です。監視兵がソ連軍進入の第一報を伝えました。

ここは、中国吉林省琿春西方約二十キロの地点、昭和十九年頃より陣地構築を始め、ここが自分の死に場所になるかも知れないと思いながら、作業を進めた所、昭和二十年八月十五日午前七時頃、折柄深い濃霧のため、視界全くゼロ、このとき異変が起こりつつあった。

天佑か神助か、俄かに天候が急変し、雲散霧消、太陽の光が燦燦と眩しい姿を現してきた。そのとき忽然と目の前に現れたのは、マンドリン銃

(自動小銃)で武装した、ソ連兵の姿であった。

一瞬鼓動が停止した。その数およそ三百人。彼等は気が付く様子もなく、話しながら歩いていく、息を止めて事態の推移を見守った。

先頭が山の頂点を越えた頃を見計らって、第三機関銃中隊が、正面と側面から、一斉射撃を行った。ソ連兵がバタバタと将棋倒しにたおれた。

呻き声や泣き声が、草むらの間を通して、手に取るように聞こえてくる。

一瞬にして戦場は修羅場と化した。殷々たる砲声は山野に響き、戦闘

機は飛来し、容赦なく機銃掃射で陣地を攻撃した。「蝟壺」で応戦していた兵士に、多数の戦死者が出た。

こうした最中に、「日本軍将兵に告ぐ。」という、ポツダム宣言受諾のビラが、上空からヒラヒラと舞い降りてきた。

戦いは終日繰り返され、夕闇が深まるにつれて、銃声は次第に消されていった。此の頃、作戦は全員斬り込み、夜十二時を期して、最後の突

撃命令が下されていた。合言葉は天壤・無窮、ついに来るものが来たことを直感し、静かに故郷を眺めて、合掌し肉親に別れを告げた。

ところが情勢は急変し、午後十一時三十分、終戦の報に接し、全員斬り込みは中止となった。嗚呼あなんとという奇跡なことであろう。死の直前三十分の違いで、九死に一生を得るとは、この瞬間から、私の人生観は、大きく変貌した。

熊本市西区 河野 隆